News Letter of Sapporo Nature Research & Interpretation Office

調査館通信

32

2007.
01-12.

2008.01 発行

http://www.cho.co.jp/

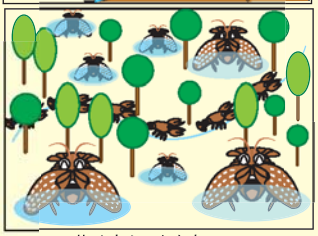
制作・発行＝さっぽろ自然調査館

◆〒004-0051 札幌市厚別区厚別中央1条7丁目1-45 山岸ビル3階
◆電話＝ 011 - (892) - 5306　ファクス＝ 011 - (892) - 5318
◆電子メール＝ chosakan@cho.co.jp
◆郵便局払込口座＝ 02740-2-58150〔(株)さっぽろ自然調査館〕

新年年賀状号

ザリガニがいたのは. . . どの沢？

ザリガニフィギュア競演



昔は良かったなあ. . .

●ザリガニが棲める場所とは？ ⟶ 13頁

人工物を利用して作られた巣
巣盤がむき出しのモンスズメバチの巣

ツヤクロスズメバチ♂

ケブカスズメバチ♂

ケブカスズメバチの巣

コガタスズメバチ

巣材を集めるケブカスズメバチ

アシナガバチの巣

●スズメバチに刺されないために ⟶ 1頁

コケ類の封入標本

マリモの封入標本

海草の展示標本

岩石の分布マップ

ユキツバキとヤブツバキ

キタダケソウの仲間の分布と標本

弥生人と縄文人の歯

●関東自然史博物館めぐり番外編　～国立科学博物館・日本館～ ⟶ 18頁

●今月までの活動・ニュース ⟶ 25頁・裏表紙

渡辺 修

今月までの活動・ニュース 1-12 月

2007 年の活動を紹介します。年間を通していろいろあったフラワーソンについては、次号で特集として、開催の裏側紹介します。

1 月

●釧路・達古武冬の調査

厳冬の達古武で、水生昆虫の調査。環境省が自然再生事業を進める森林のなかを流れる 2 つの沢で水生昆虫を採集する。外の気温は -10℃ほどなので、水から引き上げた昆虫たちは油断するとすぐに凍ってしまう。上流部の湧水周辺では、シロフエグリトビケラやオオカクツツトビケラなどの湧水などに生息する水生昆虫が見られ、自然の豊かさが実感できる。2 つの沢を比べると、人為的な影響の少ない沢のほうで、種類や個体数は豊富だった。隣り合う沢でも作業道の入り方や森林伐採の程度の違いで、生息する生き物も変わることが目に見えてわかるので、環境学習にはよい教材になりそう。（の）

2 月

●達古武行事〔10 日〕

達古武での調査会を初めて冬に開催。エゾシカによる植栽木の被食状況を調べたり、沢の源流部で水生昆虫を観察した。一般参加者は 22 名。

最初に、試験区のアオダモとミズナラの植栽木の樹高や被食状況を調査。シカ除けの囲いをしていない試験区では、ほとんどの苗が枝先を食べられていた。エゾシカもエサが密集しているのでさぞかしうれしかったろう。

次に沢を歩きながら源流部を目指す。沢沿いは、湧水が凍結してアイスリンクのようにつるつるで、その景色は幻想的にみえる。沢の上流部では、ザリガニやトビケラなどを探して採集し観察する。湧水が流れていて、真冬のこの時期でも水温は 5℃程度に保たれていた。温かい湧水のためか冬でもザリガニはそれほど深く潜っていないようで、3 匹見つかった。冬の沢の様子はふだん見る機会がないだけに、参加者にとっても新鮮な体験だったようだ。（の）

3 月

●釧路・森林再生小委員会〔1 日〕

達古武での森林再生を扱う釧路湿原自然再生協議会の小委員会が開催される。前回は 2006 年 3 月だったので、ほぼ一年ぶり。内容的には林野庁が取り組む雷別地区の実施計画検討がメインだったが、検討にかける時間はどんどん少なくなっている気が（達古武の実施計画の検討は 3 ～ 4 回会議したのに．．．）。しかし、協議会のメイン委員会たる湿原再生小委員会は 2005 年 5 月から全く開催されていないので、もう 3 年近くやっていないことになる。本会議の協議会が第 12 回まで開催されたのに、この下部委員会は第 3 回で止まっているというのは、何ともめずらしい気が。大きな要因は、この委員会だけが実質 2 省の共同開催で、話し合いが進まないためかも。（お）

●水生昆虫研究会〔3 日〕

例年と同じクリスチャンセンターで開催された水生昆虫研究会に参加。今回もう 20 回目になるそう。話題提供は、外来エビの話から、トビケラの分類、GIS を使ったイトウの生息分布推定の話題など、水生昆虫に限らず、幅広い発表が見られた。（の）

●北海道野の花を考える会・講演〔12 日〕

北海道植物友の会会員でもある吉中弘介さんから頼まれて、札幌市生涯学習センター「ちえりあ」で講演をする。野の花会（略称）は、『北海道の野の花』（北海道新聞社）の著者である谷口弘一さんが会長で、勉強会や観察会などを通して植物に親しむ会とのこと。

このときの演題は、「花の姿に秘められた不思議　～花の観察会に役立つ話～」。花好きの人に、訪花昆虫の目から花を見る習慣を持ちましょう、と触れ回るのが私の「運動」である。聴衆は約 50 名。前後半にわたる長い講演にもかかわらず真剣に聴いていただきました。（に）

●ひがし大雪ガイドセンター・講演〔17 日〕

ひがし大雪ガイドセンター代表の河田充さんから、「北海道の外来植物事情　～大雪山国立公園の外来植物をどうすべきか～」という演題での講演を依頼される。上士幌町ではこれまで、大雪山国立公園内の十勝三股にあるルピナス（北米原産）の大群落を観光資源として PR してきた。一方で、「大雪山を世界遺産に」という動きもあり、このままでいいのかという意見も出始めているという。講演では外来植物がもたらす問題や外来生物法の課題点などについて紹介したが、サブタイトルが示す問題への取り組みには「国立公園管理の問題」と「地域の社会問題」という 2 通りのアプローチがあるのではないか。地元ではまだそれほど激しい議論にはなっていないようだが、「観光資源か、有害植物か」といった対立に陥る前に、国立公園の管理者かつ外来生物の管理者である環境省は、議論の場を設けるとともに、管理者としての明確な態度を示すのが望ましい。

夜は糠平温泉でも人気の山湖荘に泊り、河田さんらと夕食をとりながら歓談。観光地としては小規模な糠平温泉でガイド業を続けるのはご苦労も多いと思われるが、いろいろ将来の夢などを語ってもらい温かい気持ちになった。（に）

4 月

●フラワーソンアドバイザー会議〔20 日〕

全道からフラワーソンのアドバイザーさんたちが集まっての会議。2006 年秋に続いて 2 回目で、これが開催に向けてのラストの会議となる。詳しくは次号で！

5 月

●第 5 回全国カタクリサミット・様〔12-13 日〕

早春の花、カタクリを縁に集い、交流しようという全国集会が様似町で開かれ、丹羽と渡辺展之が参加した。2003 年から毎年行なわれていて、道内では初めての開催。カタクリの美しさや大切さを再認識し、地域の自然環境について考えようというのが狙いだそうだ。集会プログラムは講演、交流会、野外巡検からなる。主催者発表では総勢 140 名、うち 10 数名が本州からの参加という。

本通信でもたびたび取り上げているように、調査館では倶知安町の「百年の森ファンクラブ」の皆さんと一緒に長年カタクリ調査をしている。これまでの成果を発表するよい機会だったので、渡辺展之がポスターにまとめて持参し、会場の壁に貼らせてもらった。講演の合間に見

に来る方があり、いくらかは倶知安のみなさんの取り組みを紹介できたと思う。

交流会では地元海産物を使った手料理がふんだんに用意され、参加者にはアポイ岳のオリジナルの植物図鑑を１人ずつ配るなど破格のもてなし振りだった。野外巡検では様似の里山といえる「観音山」に行き、盛りをやや過ぎたものの美しく咲くカタクリを観賞できた。

地元・様似町のみなさんはイベント慣れしており、これだけの参加人数がありながら運営が終始スムーズで、参加者と地元との交流が楽しく行なわれていた。

丹羽はその足で、苫小牧の道新支社で行われたフラワーソン説明会に出席。（に）

●滝川自然観察会・標本づくり〔19 日〕

滝川市美術自然史館主催による親子自然観察会（午前）＆標本作り体験（午後）が行われ、講師役として出掛ける。滝川には昨年度も２回同様の行事で訪問しているが、今年度はこれを３回に増やし、さらに昨年度から始まった「たきかわ野の花研究事業」に使われる植物標本の採集会も兼ねて行なった。この事業は、子ども達がもっと地域の自然に親しめるように、滝川の代表的な植物を封入標本にして学校教材や展示品にしようというもの。完成後の活用を考えて、封入標本づくりにも地元の小学校の先生などに積極的に参加してもらっている。

大人と子どもに分かれ、大人チームには封入標本用の植物採集と下処理（シリカゲル乾燥）を実際に体験してもらう。子どもチームには、昨年と同様、各自に配ったスケッチブックに自分で集めた花を１種ずつ貼り付けてもらい、特製の標本ラベルを貼ってオリジナル標本ノートを作ってもらう。子どもも何かと忙しい時代だが、ともかくこういう花の美しい季節に野外に出ること自体に、価値はあると思う。だからこそ、「参加してみよう」と思わせる工夫や努力が必要なのだろう。（に）

６月

● アポイ機器設置〔11-12 日〕

アポイ岳の高山帯に設置されている気象観測装置から、冬期の気象データを回収するためにノートパソコンを持って登山。希少植物のヒダカソウを調査する環境科学研究センターのスタッフのみなさんとも一緒である。気温・積雪のデータは問題なかったが、課題の風力データは計器が故障してまたしてもだめだった。前号の通信には、「次こそはデータが取れていることを祈る」と書いたのだが。そのほか、防水温度計の回収をしたり、ヒダカソウの調査のお手伝いをしたり。この時期のアポイにしてはやけに暑くて疲れたが、満開のアオダモなどいろいろな花を満喫できた。（に）

● フラワーソン実施〔16-17 日〕

２日間にわたっての開催。詳しくは次号で！

●滝川・標本づくり〔22 日〕

滝川自然史美術館の封入標本作りに関連して、滝川で標本採集と乾燥処理。渡辺展と松岡が参加。この日は、滝川公園で滝川市美術自然史館学芸員の半井仁さんと有志の皆さんで花の採集。５月に比べると、森の中の踏み跡道も草が茂って、ほとんどわからないような状態になっていた。草をかけ分けながら、チシマアザミやワスレナグサなどを採集する。

午後は前回同様、採集した花をシリカゲルを使って乾燥処理。2回目で作業もだいぶ慣れたようだ。その後に先月シリカゲルに埋没して乾燥させておいた標本の取り出し作業をする。シリカゲルの詰まった容器から取り出した標本の出来を、初めて見る半井さんはかなり感激の様子。シリカゲル乾燥標本の出来に感動していた昔の自分を思い出す。さらに、取り出した標本についたシリカゲルの粒を落とすクリーニング作業。こちらはかなり細かな作業で、見本の作業を見せる松岡さんの技術に感心していた。（の）

●川湯・和琴展示づくり〔26日～〕

屈斜路湖畔にある環境省の小さな施設・和琴自然教室の展示改修が行なわれることになり、展示の設計や標本の収集を始める。2年前に企画・製作したシラルトロ湖のミニ展示が好評で、その流れでのデザインとなる。近くにある川湯エコミュージアムセンターの展示も改修予定で、そちらで使う標本も合わせて収集。6月のこの時期は、ちょうど川湯のイソツツジ群落が盛りで、なかなか壮観。

和琴半島は、ミンミンゼミの隔離分布で有名なところで名前はもちろん知っていたが、ちゃんと訪れるのは初めてか。湖に突き出た森のかたまりという感じで、先端部にある噴気孔周辺の環境など、見所が多い。札幌からはかなり遠いため、なかなか頻繁には来られないのが残念。（お）

7月

●ひがし大雪・自然観察ガイド養成講座〔14-15日〕

ひがし大雪博物館（上士幌町）が毎年開催する連続講座に、今年度も講師の一人として参加した。4月早々に川辺百樹学芸員から、「今年は久々に講座で山に行こうと思うので、『高山植物の生態』で頼むよ、と言われていた。初日に講義、2日目にニペソツ山（前天狗山）に登った。講義では、最近の研究事例なども引用して、高山帯がどのように維持されているか（森林限界で高木類に何が起きているのか）、高山植物はどのように島国・日本まで「南下」してきたのか（研究者が考えるシナリオとは）、日本で見られるさまざまな高山植生の特徴などについて解説した。登山当日は、雨の予報もあって天候が心配されたが、なんとか雨にはならずに済んでよかった（前天狗からニペソツ山が見れなかったのは残念）。登山の道中も、川辺さんと私で代わる代わる鳥や植物などの解説をした。ふと、もう15年も前に、やはり博物館の行事でメガホンを担いで前天狗に登ったことが思い出され、少しなつかしかった。（に）

●オオムラサキ標本採集〔13日〕

札幌市の簾舞まちづくりセンターの活動依頼で、国蝶オオムラサキの封入標本を製作することに。札幌南部にある豊滝小学校では学校内に作った飼育舎で、オオムラサキを飼育していて、この活動を簾舞まちづくりセンターが支援している。もともと、この地域では、オオムラサキ

が自生しているが、近年は採集圧が強く数が減ってきているとのこと。保護増殖のための飼育だが、小学校の総合学習の教材としても使われている。飼育を担当しているのは地元の佐藤成宜さんで、何年にもわたり飼育に携わっていて、オオムラサキの生態にとても詳しい。

封入標本は、オオムラサキの一生をテーマに、卵・幼虫（一齢・終齢）・さなぎ・成虫（♂・♀）を封入することに決まり、それぞれの標本を提供してもらうことになる。

ちょうど成虫が羽化する時期ということで、この日はさなぎと成虫をもらいに豊滝小学校へ伺う。食樹であるエゾエノキを丸ごとネットで囲んだ飼育舎があるほか、校庭の周りにも天然のエゾエノキが生育していて、探すと幼虫やさなぎが葉についているのがわかる。終齢幼虫は、チョウの幼虫としてはかなり大きく角が特徴的。

一方、飼育舎では、たくさんのオオムラサキの♂が舞っていたが、メスはおらず。これは、♂のほうが先に羽化し♀はそれから1週間ほど後に羽化するため。そこで、♀のさなぎをもらって事務所で羽化させることにする。オオムラサキのさなぎはかなり大きく、触るとビクンビクンと大きく震えるので、慣れるまでちょっと気持ち悪い。持ち帰ったさなぎは数日後、無事に羽化した。（の）

●藻岩山調査〔17-18 日〕

一昨年に引き続き、藻岩山・円山のザリガニ調査。今回も斎藤和範さんに協力していただく。昨年の調査でかなり生息地点は少ないことがわかってきたが、主に未調査の場所を調べた。砂防ダムがハードルのように何基も設置されている場所もあり、移動も大変だ。藻岩山では新たに2箇所で生息を確認することができ、昨年確認できなかった円山でも確認することができた。（の）

●滝川・標本づくり〔26 日〕

滝川自然史美術館の2回目の観察会も滝川公園で開催。夏休みということでテーマは昆虫で、小学生5名を含む総勢10名が参加した。やはり子どもは、花より昆虫。何も言わなくても各自夢中で網を振り回して、虫を捕まえていく。チョウ・トンボ・バッタ・セミとなんでもあり。最初は花と関係して、訪花昆虫をメインにと考えていたものの。。。子ども達はお構いなし…。特に、ちょうどアブラゼミが大量に羽化していて、幹の低い位置にいるので子どもでも容易に捕まえることができたので、みな満足そうだった。

午後からは、捕まえた昆虫を標本に。標本箱から作ってもらい、次に虫の標本作り。最初は落ち着きのなかった子どもたちも、要領がわかると次第に作業に集中していくようになる。チョウやセミの手足やハネを次々に整えて標本箱が埋まっていく。皆できた作品に満足そうに持ち帰っていった。一方、大人たちは、封入標本用の花の標本処理をした。（の）

●札幌市博物館センターロビー展〔27 日〕

博物館活動センターがサッポロカイ

ギュウの展示を市役所一階のロビーで行なった。レプリカや解説パネル、オリジナル折り紙などが並んでいたが、にぎやかしに調査館製作の封入標本たちも展示されていた。本筋とは全く関係ないが、興味深そうに見ていた人も多かったので、多少の人寄せにはなっていた。（お）

8月

●講演会「ファーブルにまなぶ」〔11日〕

ファーブル『昆虫記』刊行100周年の記念事業（日仏共同）として昨年、北大総合博物館では「ファーブルにまなぶ」と題したロングランの企画展が行なわれた。残念ながらそちらには行ってないのだが、それにリンクした講演会が道新ホールであり、たまたま休みが取れたので出かけてみる。演者は『札幌の昆虫』（北大出版会）でおなじみの木野田君公さんと、昆虫学者の日高敏隆さんの二人。ネームバリューでは日高さんが主演だったのかもしれないが、ここでは内容の面白さで勝っていた木野田さんの講演について紹介する。木野田さんは、手稲の自宅で12ヶ月間続けたという昆虫採集の成果を発表。これまでに同定できた昆虫は、じつに11目123科456種にのぼるという。「自宅で虫採り」といえば子どもの自由研究を連想させるが、筋金入りの虫屋さんが本気で取り組んだものである。ストレートな迫力ではないが、「我が家の庭の昆虫」

というほのぼのタイトルとはかけ離れたしベルの凄みがあった。

間違っているかもしれないが、公人である学芸員などを除くと、木野田さんのように一般人の前に出てきて話をしてくれる虫屋さんというのは、案外少ないのではないだろうか。お盆前の土曜ということもあったのか、日高さんのような有名人を呼んだ割りにお客が少なかったのは残念である。（に）

●オオムラサキ標本採集〔13日〕

7/13に続いて、2回目の標本採集に再び豊滝小学校へ。この日は札幌といえども30度を超える暑さと強烈な日差しで、とても日なたにはいられない天気のなか、卵と一齢幼虫を採集する。この時期は卵がふ化するころ。暑さにめげずに、エゾエノキの葉の表面に注意しながら探していくと、葉にびっしりと産み付けられた緑色の卵が見つかる。一つの卵塊は50卵ほど。標本としてほしいのは産卵していて食痕のない葉であるが、ほとんどの葉が幼虫に食べられた痕があり、探すのは難しい。次に一齢幼虫。少し、ふ化には時期が早かったこともあり、なかなか見つからず、佐藤先生に見つけるコツを教えてもらう。ふ化すると幼虫は必ず葉の先端を自分の居場所にするそうで、葉の先端を丹念に探すしていくと、見つかる。また、すでに２齢幼虫になっているものもいた。特徴的な愛らしい角がつくようになるのはこの２齢幼虫からである。（の）

●達古武調査体験会〔25-26日〕

今年度の達古武の調査体験会は、初めて夏の実施となった。しかも、達古武キャンプ場のバンガローを借りての1泊2日の宿泊プラン。しかし、日程が決まってからの時間も短かったため、直前まで申込みが少なく心配されたが、直前に標茶高校の生徒からの申込みがあり、参加者13名にスタッフ等を合わせて総勢25名ほどになった。

午後スタートの初日は、湖岸や川に設置しておいたワナを引き上げ、ザリガニや魚類などの観察。環境の異なる場所に仕掛けて、それぞれ生息する生き物の違いについて観察してもらう。場所によっては特定外来種のウチダザリガニがたくさんかかり、環境省スタッフの指導のもと、かわいそうだが、その場でお酒と熱湯で捕殺し、夕食としていただく。その後は、水草の採集と標本作り。湖畔で水草を採集・観察した後、水を張ったバットを使って、台紙の上に水草を載せて標本にしていく。最後にペットボトルで、魚用のトラップを作ってもらい、沢に仕掛けてこの作業は終了。トラップは翌朝に確認することにする。

夕飯は皆でシチューやパンの準備。ヤナギの枝にパン生地を巻いて、各自思い思いに焚き火で焼いて、美味しくいただく。

翌日は、朝食前にトラップの確認。この沢では初確認となるヤツメウナギが見つかる。朝食後に森に移動し、自然再生地の試験区周辺で、稚樹調査とササ刈り作業を行なう。稚樹の量を調べて、次世代を担う広葉樹の稚樹が少ないことを実感してもらい、その阻害要因の一つであるササを一時的ではあるが刈り取って成長の手助けをする。特にササ刈りのほうは、事後アンケートでも今後もやりたいという意見が多数あり、夢中になる人も多かった。

いつも時間に追われながらの進行で、宿泊になればゆとりができると思っていたが、それでも結構時間に追われた2日間だった。（の）

9月

●知床森林調査〔10日～〕

調査館メンバーが学生時代に毎年頻繁に訪れ、最初の研究発表の題材ともなったのが知床の針広混交林。希少植物調査で2000年前後に訪れて以降、なかなか行く機会がなかったが、今回森林調査の仕事で行く機会があった。自然も街もなつかしいところばかりだったが、海側に大きく拡幅された道路ができて様変わりしたウトロの町や、エゾシカの影響を強く受けてササもほとんどなくなるような変化をしている越冬地の林床にびっくり。（お）

●達古武観察会・道新〔23日〕

道新主催、後援環境省・釧路町で行なわれたイベント「森を知ろう、育てよう！」に調査館から修と展之がスタッフとして参加。釧路の印刷工場落成記念イベントの一つで、紙を使う新聞社としては、原料である木や森について考える機会にしようという趣旨。達古武での自然再生について紹介することになる。参加者は19名で、年配の人が多く、家族連れが少々といった構成。内容は、アカネズミの観察や木の持ち去り実験、木の苗・タネの採取と苗畑への仮植え・タネ撒きなど。

ネズミ観察ではアカネズミとヤチネズミの両方を見ることができ、数も多かった。前年のどんぐりは不作だったが、それに関係なくこの年はネズミの個体数が

多いらしい。それなので設置した実も種類に関係なく、ほとんど持ち去られてしまい、比較のほうはあまりうまくいかなかった。その後、山道を登りながら、ヤマモミジやアオダモの種子を採取するが、ミズナラはこの年も不作。他地域では豊作が伝えられていただけに期待されたが、達古武では3年連続の不作となった。林道脇に生えていて、将来、刈られてしまいそうな稚樹は、自然再生地への植栽用の苗にするため掘り起こして採取した。苗畑に持ち帰ったタネは土を入れたバットに播き、掘り取った稚樹は苗畑に仮植えした。将来、山に返すことになる予定。

事後のアンケート見ると、若い人はアカネズミの観察を面白く思った人が多く、年配の人は、苗畑での作業を面白く感じた人が多かったようだった。（の）

●自然史研究会・登別〔29-30日〕

今年の自然史研究会は、登別クマ牧場の前田菜穂子さんのご尽力により登別での開催。会場は、登別の山奥にある「登別ネイチャーセンターふぉれすと鉱山」。鉱山跡地の建物を利用していて、市民のコミュニティーセンターの役割もあり、指定管理者制度によって地元NPOのモモンガ倶楽部が管理・運営している。ここは自炊や宿泊施設もあり、安価で誰でも利用することができる。多くの人が集まっていて活気があるのが印象的で、いろんな活動グループがそれぞれ様々に活動していて、山奥になぜこんなに人がいるのかと不思議に思うほど。

自然史研究会の開催もその日行なわれている活動の一つで、参加者は20名ほど。ただし、地元の方々が多く、会員は5名でちょっと寂しかった。モモンガ倶楽部の吉元美穂さん、地元ヨシキリの会の伴野美江さん、会員からは斎藤和範さんと中岡利泰さんが発表。

翌日のエクスカーションは、キウシト湿原の会の堀本宏さんの案内で、登別に残るキトウシ湿原の散策。現在は、周辺を住宅地などに囲まれてしまっている数haの小さな湿原だが、一部に高層湿原が残っている。市が土地を買い取り、ボランティアによって、水位・水質観測などの調査や、湿原の再生などを行なわれている。市民と役所の関係も良く、一般的には対立しがちな両者の関係は興味深い。

その後、倶多楽湖を回って、登別クマ牧場へ。クマ牧場というので、馬や牛がいるような牧場を今まで勝手に想像していたが、ロープウェイを使って山の上まで行くのでびっくり。前田さんの案内でヒグマ博物館・アイヌコタン・牧場のヒグマを見学する。当初は植生のある場所でクマを飼育していたのが、ヒグマに踏まれて植生が全滅してしまい、コンクリート上で飼育するようになったとのことだが、その様子はやはりかわいそうに見えた。

今年の自然史研究会は、エクスカーションのメニューが多様で、十分に楽しませていただいた。（の）

●帯広百年記念館・標本づくり〔30日〕

滝川市と同様に、地域に合った封入標本づくりが始まった帯広百年記念館の観察会・標本採集会。自然史研究会と日程が重なってしまい、こちらには渡辺修と製作班・柴田が行く。帯広でのテーマは「アイヌ語で自然観察」。アイヌが利用した植物の部位などを封入して、学習・展示に役立ててもらう。

最初に持参した封入標本をいろいろ見せて特徴などを紹介。初めて見たという人が多く、それなりに好評。午前中は緑ヶ丘公園内で参加者とともに採集、マムシグサやエゾトリカブト、ヤブマメなどを集めた。利用部位の採集ということで、掘り起こす作業が中心で、普段の観察会とは違ったスタイル。採集した後は、記念館の作業室でシリカゲルで乾燥させる

作業のデモンストレーション。午後には池田学芸員・内田学芸員と、市内の緑地でオオウバユリの成長段階別の根茎など足りないものを採集。

ちょうどこの季節はエゾリスが活発に活動していて、チョウセンゴヨウやカシワの実をせっせと集めていた。カシワは豊作のようで、多くの実を見かけたので、ついでにどんぐりや実生も標本材料として集めさせてもらった。（お）

１０月

●滝川観察会・標本づくり〔6 日〕

春・夏に続いて、美術自然史館主催による秋の自然観察会「木の実をあつめよう！」の講師役として出掛ける。

春は身近な野生植物の花の観察と標本採集を体験してもらったが、秋はその応用で、果実の観察と標本採集を体験してもらう。子どもたちは、学校でいろいろな果実のつくりや種子散布の仕組みを学習している。小雨が降っていたため、傘を差しての観察会になったが、ナナカマド・ドイツトウヒ・オニグルミなどいろいろな木の実が集まった。この後は室内に戻っての作業。お菓子の空箱を１人ずつ配り、採ってきた果実を木工用ボンドとセロテープで貼り付けてもらう。標本一つずつに特製の標本ラベルを貼って標本箱が完成。標本箱はお土産として持ち帰ってもらった。　（に）

●フラワーソン講演会〔22 日〕

詳しくは次号で！

● アポイ気象観測機器設置〔24-25 日〕

道の環境科学研究センターでは、アポイ岳に点在するヒダカソウ生育地に温度計を設置し、環境条件を調べている。調査館ではそのお手伝いをしていて、毎年この時期、アポイ岳に登っている。エリアが広く 2 隊に分かれる必要があったため、地元のアポイ岳ファンクラブのみなさんにも応援してもらう。稜線に出ると風は冷たく、ダケカンバの裸樹が目立って冬近しだったが、ふもとでは紅葉がちょうどみごろだった。（に）

日照時間が短いシーズンの作業となったため、2 班体制となり、久しぶりにアポイへ行く。現在は通行禁止となっている幌満コースから入山するが、ハイマツがかなりかぶさってきて、道が分かりにくくなっている場所も。クマの糞やたくさんの子ダニがいるところは相変わらず。

ファンクラブの方のおかげで作業はすぐ終わったが、よい天気で山を楽しむことができた。

11 月

●北海道 GIS データベース研究会セミナー〔30 日〕

今年で 8 回目となる GIS データベース研究会セミナーが札幌エルプラザで開催された。あらかじめ決まっていたプログラムを見ると、環境分野のテーマの発表がほとんどないため、午後から参加。や

はり環境調査関係も例年に比べて、少ない印象。午後最初の発表は環境科学研究センターの高田雅之さんの「衛星画像による植生区分と解析への活用」。これまで高田さんが関わってこられた衛星画像を活用した自然環境分野の解析事例を紹介していた。時間の都合もあり、一つ一つの内容が詳しく説明されなかったのは残念だったが、多くの解析事例で、衛星画像の有効性が示されていた。衛星写真を使った植生図の作成も、人間の目を頼りに作るのに比べて、遜色ないかそれ以上の様子。あまり細かな植生区分には対応するのが難しそうだが、そもそもそんな必要性もほとんどないため、十分に活用できそう。後はコストの問題だけなのかな。（の）

12 月

●北海道植物友の会講演会〔1 日〕

年末恒例の講演会が市内の「かでる 2・7」で開かれた。演者は花粉分析で知られる星野ツサさんと宮木雅美さんである。星野さんは、今年行かれたパプアニューギニアの自然について講演された。私は不勉強で知らなかったが、赤道直下にありながら 4000 m 級の山があるために、U 字谷（氷河地形）がみられるそうだ。しかもナンキョクブナが現存している。今回は国際第四紀学会のエクスカーションだったそうである。

宮木さんは、石狩浜やサロベツ海岸で長年関わってこられた海浜植生の保全研究について紹介された。海岸砂丘では、私たちの想像を超えるスピードで常に砂が動いている。ハマナスやハマニンニクのような植物があれば砂は堆積していくが、裸地では逆にどんどん侵食されてしまう。いったん面的に裸地ができてしまうと、連鎖的に侵食が起こりやがて砂丘が崩壊するという。石狩浜ではレジャー用の RV 車が砂丘に入り込むことで、サロベツでは道路建設などに使われる土砂を大量に採掘することで、それぞれ砂丘の崩壊や消失が進んでいる。　こうしたことを、一つ一つデータを使って丁寧に解説していただいた。野外データの取り方のお手本のような話だった。興味を引いたのは、砂丘の侵食面から砂に埋もれた空き缶や食品容器を拾い出し、そこに印字された賞味期限表示を読み取り、砂の堆積スピードを推定するという手法である。ゴミの投棄は歓迎できないが、こういう利用法もあるのかと、その着想に感心させられた。（に）

達古武・鹿痕跡調査（2月）

達古武・冬の沢歩き（2月）

上士幌・エゾシカとカケス（3月）

様似町・かたくりサミット（5月）

様似町・かたくりサミット（5月）

滝川・標本採集と観察会（5月）

滝川・標本づくり（5月）

滝川・シロヤナギの花（5月）

アポイ岳・ヒダカソウの花（6月）

アポイ岳・アオダモの花（6月）

川湯硫黄山・イソツツジ（6月）

和琴半島オヤコツ（6月）

札幌・オオムラサキ幼虫（7月）

ニペソツ山・登山観察会（7月）

ニペソツ山・イワウメ（7月）

ニペソツ山・ホソバイワベンケイ（7月）

滝川・標本採集と観察会（7月）

札幌・博物館ロビー展（7月）

和琴・ウメガサソウ（7月）

和琴・ミズゴケとマダラスズ（7月）

達古武・水草調査（8月）

達古武・ウチダザリガニ（8月）

達古武・水草標本づくり（8月）

達古武・調査体験会（8月）

達古武・追跡調査（9月）

達古武・自動撮影装置（9月）

達古武・苗づくり体験（9月）

自然史研究会（9月）

登別・クマ牧場（9月）

登別・倶多楽湖（9月）

帯広・標本づくり（9月）

滝川・標本採集と観察会（10月）

滝川・標本づくり（10月）

屈斜路湖（10月）

和琴・露天風呂（10月）

アポイ岳・ハイマツこぎ（10月）

アポイ岳・再生実験地（10月）

アポイ岳・ホシガラス（10月）

アポイ岳・ヒダカミセバヤ（10月）

アポイ岳・月（10月）

頒価＝500円